

江戸時代を学ぶ浮世絵散策システムの構築

野村 遼也

江戸時代における日本文化の象徴である浮世絵は、その芸術的価値のみならず、当時の社会生活や文化的背景を映し出す重要な資料であるが、膨大な数の作品や散逸した資料の整理が研究の大きな課題となっている。そこで、本研究では、浮世絵を中心に、人文研究者および一般利用者向けの効率的なデータ管理と検索を可能にするシステムの構築を行うことを目的とした。従来のアナログ作業に代わり、タグ付けによるデータの分類とデジタルアーカイブ化を実現し、効率的な検索および視覚的な情報整理を可能にする仕組みにより、研究者と一般利用者が、浮世絵を散策しながら江戸時代を知ることができるシステムの開発とその検証を本研究では行った。

本研究で開発したシステムは、浮世絵や引き札を含む画像データに対し、メタデータと階層化されたタグ付けを行い、検索機能やギャラリー表示機能を提供するものである。研究者向けページと一般利用者向けページを設け、それぞれのニーズに応じた機能を実装した。研究者向けページでは、タグの編集や自作のタグ構造の作成機能を提供し、人文学研究の新たな視点を生み出す支援を目指した。一方、一般利用者向けページでは、テーマ別に検索できる機能や視覚的に分かりやすいインターフェースを通じて、浮世絵への関心を促進することを目指した。

本システムの有用性を検証するため、筑波大学の人文研究者および学生を対象に評価実験を実施した。実験では、研究者向けにはタグ検索や分類の効率性、学生向けには浮世絵の探しやすさと興味喚起に焦点を当てた。その結果、研究者からはタグ検索やメタデータ管理の有用性について高評価を得ることができた。しかし、タグ編集機能の強化やサムネイル表示の追加が求められた。また、学生からは検索の使いやすさについて一定の評価を得たが、興味喚起の面では課題が残った。システムの拡張性を考慮し、IIIF(International Image Interoperability Framework)規格への対応やデータのインポートおよびエクスポート機能の実装を進めることで、国内外のデータ連携を可能にする将来の発展性を確認した。今後の課題として、より直感的でインタラクティブなインターフェースの実現や、AI技術を活用した動的なデータ分析機能の開発が挙げられる。

本研究の成果は、デジタル技術を活用した人文研究の効率化を促進するだけでなく、浮世絵をはじめとする日本文化遺産の保存および普及に寄与するものである。また、本システムは浮世絵に限らず、他の文化財データの管理や検索にも応用可能であり、学術研究や一般利用の双方において新たな可能性を示したと考える。

(指導教員 時井 真紀)